

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

No. 10

1983年1月1日

## 第10号 目 次

1. 理事会報告
2. 学術・文化情報
3. 会員活動報告
4. 57年度科研費
5. 事務局から  
ラテンアメリカ研究センター  
めぐり

### 1. 第13回理事会報告

1982年10月30日(土) 13:00~17:00  
於東京大学教養学部。出席理事7名。

#### ○報告事項

- i) 会報9号を編集・発行した。
- ii) 第四回大会の日取りは、翌83年6月4日・5日とほぼ決定した。
- iii) 会費納入状況 現在、未納者は延べ人数で112人。預金残高は約27万円である。
- iv) 年報第三号編集状況 執筆要項を作成した。第三回大会における鶴見俊輔氏講演の掲載については同氏の同意を得た。原稿応募は6篇、うち4篇が到着した。

#### ○審議事項

- i) 入会・退会審査 書類を検討のうえ、正会員4名の入会を承認した。退会希望者1名についても同じくこれを承認した。この結果正会員数は231名となった。
- ii) 団体入会について 10月17日、某大学の西洋史研究室より団体入会の申入れがあった。団体入会の規定は会則にないので、ひとまず研究室代表者に個人として入会することをすすめ、会則を改めるかどうかは次回総会に向けて考慮することを決定した。
- iii) 中国社会科学院からの交換申入れ 本学会会員が個々の業績を先方に直接送ってくれ

るよう依頼する会告を、次号会報に掲載することを決定した。

iv) ラテンアメリカ・カリブ地域研究国際連盟(FIEALC)について 本年8月、同連盟はブラジルで大会を開催して発足した。これについては、理事会より関心を有する旨の書簡を送り、いましばらく事態の進展を見守ることを決定した。

### 2. 学術・文化情報

#### i) 日本学術会議第86回総会報告要旨

\* 本学会は1982年6月2日をもって日本学術会議の登録学会となりましたが、同年10月27日、同広報委員会の作成した「改革要綱を可決、新執行部選出——日本学術会議第86回総会報告——」が、同文書を本学会会報に掲載して欲しい旨の書簡とともに事務局に届きました。紙面の都合で全文掲載は不可能なので、以下に前半の、全体の要約にあたる部分を掲げます。

緊迫した雰囲気のもとで、第86回総会は、10月20、21、22日の3日間にわたり開催された。第12期開始とともに発足した日本学術会議改革委員会は、精力的な活動を続けてきた。前総会で改革試案が採択されるや、直に会員、有権者、学会・協会、学識経験者などの討議に付され、それらをまとめた改革要綱案が、今総会に提出された。活発な審議に基づく若干の修正ののち、独立して職務を果たす国の機関としての現学術会議の基本的性格を保持し、その役割の一層の発展を目指す改革要綱案は圧倒的多数の賛成のもとに要望・声明などとともに可決された。

その直後、伏見会長、岡倉・塚田両副会長は、採択された要綱をもって政府との交渉に入るにあたって、これまでの経緯を拭い、執行部の陣容を一新して当たることが必要であるとの判断を示し、辞意を表明した。会員は

## ラテンアメリカ研究センターめぐり（８）

### 拓殖大学

拓殖大学は1900年創設（現在、商・政経・外国語の3学部・短大・大学院・留学生別科、北海道短大）以来、アジアをはじめ、ラテンアメリカ特にブラジルには多くの卒業生が移住し、既にその二・三世も含めて、地味ながら原地の社会に深い根を下ろしてきていること、ラテンアメリカに関する独立した研究センターは持たないが、ラテンアメリカに関する教育・研究は以下の授業内容からも明らかのように、ラテンアメリカ研究、同事情講座の他、各専門科目の中で地域性（特にアジア・ラ米・中近東）を重視する方向で授業が行われているところに特色がある。

関連文献の購入は各学部所属の研究者の要請にもとづいて行われ、「大学図書館」の他地域研究（主要研究対象地域は上述と同じ）を中心とする「海外事情研究所」（所長：福島慎太郎）の付属図書室で管理されている。なお後者はスペイン語、ブラジル・ポルトガル語、アラビア語等11の外国語講座担当教員を背景とする「語学研究所」（所長：瓜谷良平。語学関連図書室を有する）等との有機的統合をはかる計画が目下進行中である。

ラテンアメリカに関連する講座を列記すると、「中南米経済特論」（大学院博士前・後期、福島正徳）、「ラテンアメリカ研究」（商・政経学部一ブラジルの置かれている国際環境を中心に、福島正徳、短大一鉦山史を中心に高橋道樹、北海道短大一高橋晃平）、「ラテンアメリカ史」（外国語学部一以下外と略記、松下直弘）、「ラテンアメリカ事情」（外、高橋道樹）「ラテンアメリカ文学概論」（外、野谷文昭）の他、「移住論」（商・政

経、鈴木讓二）では、日系ブラジル移住を事例研究として、「国際開発論」「国際経済学」（大学院・学部、広瀬一彦）では、ラ米中進国の貿易と経済発展、ラ米諸国の工業開発と国際金融という内容を中心に、「スペイン語学特殊研究」（外、浦和幹男）ではスペインと中南米との文化的つながりを主題に、「国際経営論」（商・植木英雄）では国際経営と地域（特にラテンアメリカ地域）の経営風土との相互作用関係を中心に論ずるという体制をとっている。

外国語学部は英米・中国語の他、スペイン語科を有し、メキシコ国立自治大学、スペイン国立サラマンカ大学留学生別科に年間、各5～6名の留学生を送り出している。

前記の「海外事情研究所」では、酒谷隆（客員講師）がラ米を担当。ラ米関連購読誌は *Conjuntura Económica*、*Inter American Economic Affairs*、*Visión*、*Latin American Weekly Report*、*Latin American Regional Report*、*Washington Letter on Latin America* 等十数誌。尚当研究所は国際関係、地域研究に関連する内・外の講師を招いて月2～3回のペースで研究会を開催している。ラ米に関する共同研究もその体制を整えつつある。

研究論文・報告・資料紹介等は「拓殖大学論集」、「拓殖大学研究所年報」、「海外事情」（月刊）、「海外事情報告」、「語学研究」で発表されている。

尚主要研究対象地域はメキシコ、ブラジルである。（文責：福島正徳）

事態の厳しさを改めて認識するとともにその辞任を諒承し、決意を新たに直ちに新執行部を選出、久保亮五（第4部）会長、安藤良雄（第3部）、八十島義之助（第5部）両副会長が決定された。

なお改革要綱案策定と並んで、学会会議が本来、日本の学術の進展のために常時果たすべき多くの仕事が各種委員会の活動として続けられており、それらは口頭もしくは文書報告として173件に及んで紹介された。

（日本学術会議広報委員会）

#### ii) 中国・ブラジル歴史研究室との交流を

中国のラテンアメリカ歴史研究会が置かれている武漢師範学院歴史学部ブラジル歴史研究室で学ぶ若手研究者から、相互の研究成果交流を希望する手紙がとどきました。日本語で結構です。ご関心のある会員は、是非下記の住所へご連絡下さい。

中国武漢市 武漢師範学院歴史学部  
ブラジル歴史研究室 劉 明鑑

### 3. 会員活動報告

#### i) 定例研究会

東日本部会と西日本部会はそれぞれ下記の日程で定例研究会を開催した。

##### 東日本部会第5回定例研究会

日時 11月13日(土) 14:00~17:00

場所 上智大学7号館14階特別会議室

報告 1. 「コスタリカの実験開発の現状と国際協力における問題点」 東祥三（国連工業開発機構） 2. 「中米の近代化過程について——エル・サルバドルを中心として」 後藤政子（東海大学）

##### o 西日本部会

(1)西日本部会第5回定例研究会は、1982年9月25日(土)午後2時から関西大学経商研究室棟で開催され、次の二つの研究発表がおこなわれた（出席者15名）

1. 松久玲子（京都大学）メキシコにおけるインディヘナスの「統合」教育について

2. 山蔭昭子（神戸商科大学）Garciá Márquezの初期短編について

松久報告は、メキシコにおけるインディヘナスの「統合」教育のあゆみを、非インディ

ヘナス集団への同化と土着文化の尊重という両側面を軸にして考察し、あわせてインディヘナス自身の主体性の回復をめざす新しいインディヘナス運動について紹介した。

山蔭報告は、今年度ノーベル文学賞に輝いたガルシア・マルケス文学の形成過程（フォークナーの影響、現実政治との関係など）を、報告者自身が最近邦訳した初期短編集『Ojos de Perro Azul』を主材料に、年譜的に解明した。（文責 青木芳夫）

(2)定例研究会西日本部会（第6回）は、1982年11月13日(土)午後2時から5時半まで、南山大学イベロアメリカ・センターで開かれ、8名が参加して活発な討議がかわされた。報告者、テーマおよび報告要旨は次の通り。

1. 二村久則（名古屋聖霊短期大学）「70年代メキシコの政治過程——82年経済危機への伏流」 最近のメキシコ経済の危機が過剰な石油生産によるものであり、また政権交替時にみられる一時的な混乱であることを認めながらも、この危機が同時に、70年代のメキシコの政治システムにおける暫次的変化過程を背景にした、構造的側面をも有するものであることを論じた。

2. 松下洋（南山大学）「ラテンアメリカにおけるカストロ主義と中ソ対立、1959-68年」

70年代の都市ゲリラ運動と60年代末のカストロ主義の後退との関連性に焦点をあてて、キューバ革命をめぐる中・ソの評価の推移を論じた後、カストロ主義とキューバ革命には微妙なズレがあり、そのことを、ニカラグアを除く70年代のLA革命運動は理解しなかったからこそ失敗に終わったのではないかと、この結論を導いた。（文責 三橋利光）

#### ii) 第10回世界社会学会議に出席して

大倉秀介（都立工科短期大学）

国際社会学会ISA主催の世界社会学会議が今回（1982年8月16日-21日）メキシコ市において、「社会学理論と社会的実践」というテーマのもとに3千人をこえる参加者をえて開かれた。今度の大会は、ISAの創立（1949年）以来欧米・カナダ以外の地域、したがってラテンアメリカで初めて開かれたという意味で画期的な出来事であった。

今大会のプログラム委員長をつとめたラル

フ・ターナー（I S A 副会長）は、メキシコでの開催の意義をつぎのように述べている。ひとつは、発展途上諸国や第三世界の社会学者の参加を容易にし促進すること、もうひとつは、世界各国の社会学者にラテンアメリカをはじめ発展途上地域がかかえている諸問題に対する積極的関心を促すことである。

さらに、今大会の性格を象徴するかのようには、ラテンアメリカの代表的「従属理論」家の一人であるブラジルのF. H. カルドーゾがI S A の次期会長に選出された。

地元メキシコ側の熱意も相当なものであった。国立芸術院で行なわれた開会総会にはJ. L. ポルティエヨ大統領夫妻が臨席し、U N A M の学長オクタビオ・リベロは現代社会の危機に際して大学がそして人文社会学者が勇気をもち団結して問題に立ちむかうべきであることを強く訴えた。またメキシコ側実行委員長のフリオ・ラバスティダ M. デル・カンポはメキシコ社会学の歴史的発展を跡づける報告を行ない、最後に「社会学は世界的であらざるをえない」というA. トウレーヌの言葉を引用して参加者にラテンアメリカひいては第三世界の諸問題への関心を促した。

大会全体は、総会のほかに37のシンポジウム、37の各専門研究委員会が組織する一連のセッション、それ以外の臨時セッション、メキシコの組織委員会主催の特別セッションなど全部で千件をこえる報告と討論が行なわれた。したがって、その運営の苦労は大へんなものであったと推察される。ときどき当日になってプログラムや会場の変更があったり、通訳の有無など混乱がみられた。

大会参加者の顔ぶれはどうしても国情を反映して先進資本主義国が最も多く、ついで社会主義諸国、第三世界の中の先進的地域という順序になり、あるアフリカの代表は同地域からの社会学者の参加がほとんどない事実をとりあげI S A の配慮が欠けていると抗議していた。

研究者の数や蓄積の量からみてまだまだ大きな格差があり、また問題意識や関心の焦点にずれを感じさせるところもあった。しかし、それぞれの立場から率直に意見を出しあうことによって相互理解を深め共通の認識の輪を広げてゆく場として、今回の大会はとくに第

三世界に社会学者が目をむける契機として有意義であったのではないかと思う。

iii) 国際アメリカニスト学会に出席して

東 明彦（大阪外国語大学）

本年9月5日から10日まで、イギリスのマンチェスターで、ラテンアメリカに関する総合的な学会である国際アメリカニスト学会の第44回大会が開かれた。本大会では、歴史をはじめ、考古学、文化人類学、政治など8つの分野の総計百余りの部会が組織され、出席者も千余名に達した。日本からの出席者は、東京大学の増田義郎教授（報告題目「アンデス民族誌における海草」）、大阪外国語大学の染田秀藤助教授（報告題目「歴史家としてのバルトロメー・デ・ラス・カサス」）と筆者の3名であった。大会中、研究報告の各部会のほかに多彩な催し（マンチェスター市長主催のレセプション、中南米諸国の映画の上映、コンサートなど）が行われ、大会出席者の宿舎となったマンチェスター大学学生寮の食堂、喫茶室での歓談とともに、参加者の情報交換の場として有意義であった。

各分野のいくつもの部会が、マンチェスター大学の四つの建物において並行して行われたので、筆者が多少とも出席することのできた部会の数はきわめて少ないが、以下、筆者の出席したラテンアメリカ史に関する二、三部会について簡単に述べる。

○「新大陸の征服・植民・政治への新キリスト教徒の参加」（座長Eva Uchmany）

報告者Eva Uchmany「イスマノアメリカにおける新キリスト教徒史の時代区分の試み」

Alfonso Quiroz「イスマノアメリカにおけるポルトガル系新キリスト教徒の財産没収（1635-1649）」 Edgar Samuel「トゥクマンの司教、フランシスコ・デ・ビトリア（1540-92）」 Anita Novinsky「18世紀ブラジルの政治・経済における新キリスト教徒の役割」 Quirozの報告をはじめとして、ポルトガル系の新キリスト教徒の動向に焦点を定め、それを統計的に明らかにしようと試みた報告が多いのが注目された。

○「新世界の発見・征服時代のヒストリオグラフィ」 （座長Sabine MacCormack）

報告者R. E. Lewis「ペルー-征服におけるロペス・デ・ゴマラ」 染田秀藤、報告題目

は上述。Sabine Mac Cormack 「ふたつの世界のあいだに — アンтониオ・デ・ラ・カランチャの歴史グラフィック(1584-1654)」報告はいずれも発見・征服時代の歴史グラフィックを新しい視点から再評価しようと試みたもの。

以下、いくつかの部会のテーマと座長のみを記す。

○「教会」(座長 David Brading)

○「植民地時代のイスマノアメリカにおける原住民の反乱」(Leon Campbell)

○「植民地時代のチアパスにおける経済と商業」(Mari-Jose Amerlinck de Bontempo)

○「新しいエスノヒストリーは存在するか? — 植民地時代の新大陸における人口動態と民族歴史学的研究 —」(座長 Teresita Majewski)

最後に、今回は、大会がフォークランド紛争の直後にイギリスで開かれたということで、アルゼンチンをはじめとする中南米諸国の研究者の出席取り消しが相当数に上り、そのため予定されていた部会や研究報告で変更や中止になったものが少なくなかったのは残念であった。

IV) 日本国際政治学会に出席して

二村久則(名古屋聖霊短期大学)

日本国際政治学会の1982年度秋季研究大会が、10月23・24の両日、成蹊大学で開催された。近年この学会でも、ラテンアメリカに関する研究報告がしばしば行なわれるようになってきた。これはラテンアメリカに対する一般的な関心の高まりもさることながら、相互依存の進行する現代世界において、この地域で発生した諸問題が国際関係全体に影響を及ぼす例が多くなっていることを示している。

今大会では、日本ラテンアメリカ学会の会員でもあるグスタボ・アンドラーデ上智大教授が、「南大西洋の紛争：南北問題としての地域紛争」という論題のもとに、マルビナス(フォークランド)紛争についての報告を行なった。テーマがきわめてカレントな問題であり、またアンドラーデ氏がラテンアメリカ寄りの立場で発言しただけに、この報告は満場の注目を集めた。コメンテーターの細谷千博・一橋大教授が、逆にイギリス側に立った

意見を述べて挑発したために、会場は時ならぬ南北対立の様相を呈して興味深い成行きとなったが、残念なことに時間切れで、議論がそれ以上に進展することはなかった。

このように他学会でのラテンアメリカ関係の報告が増加するにつれ、私ども地域研究者は一層の理論武装が必要になることを痛感した次第であった。

V) 日本平和学会第10回研究大会

松下 洋(南山大学)

11月27・28日の両日名古屋大学で開催された。<第3世界にとっての平和>セッションでは松下洋が「ラテンアメリカの軍拡と軍縮 — フォークランド紛争との関連において —」と題する報告を行い、加茂雄三氏がコメントした。<米ソ経済と平和>セッションと、上記両セッションの総括部会で山崎春成氏が司会をつとめた。松下は、アルゼンチンがフォ戦争で示されたように高度な最新兵器を保有していたのは何故か、を明らかにするという観点から、同国を含めた南米諸国の軍拡傾向を分析した。加茂氏は欧米的価値観を排してラ米軍部を捉えるべきことを提案した。ラ米の他、A E A N諸国の軍事化に関する報告があったが、ラ米との類似点も少なくなく、軍部などの研究に関しては、他地域研究者との交流の必要性を痛感した次第である。

VI) 文部省科学研究費補助金(総合B)による研究連絡会合の開催について

本年度、学会員諸兄姉の御協力のもとに申請していた文部省科学研究費補助金(総合研究B)の研究計画「ラテンアメリカ地域研究の問題点 — 学際的研究計画のための連絡」(期間一箇年、研究代表者増田義郎)は首尾よく採択され、1982年10月31日(日)、東京・国際文化会館において第一回会合が開かれた。研究分担者21氏はすべて本学会会員で、そのうち15名が当日出席した。

先ず各研究分担者から、各人の所属機関におけるラテンアメリカ関連の研究・教育活動について報告があった後、日本におけるラテンアメリカ地域研究の現状調査について討議がなされた。調査の第一段階として、本学会第三回総会で提案のあった日本におけるラテン・アメリカ研究者の名鑑(directory)作成が提案され、そのための調査票について、

増田の用意した原案をたたき合にして審議が行われた。この調査は近日中に実施される予定である。

会合は本年度中に、さらに二度にわたって開催される予定である。(増田義郎)

Vii) 上智大学イベロアメリカ研究所活動報告  
(82年10月~83年1月)

#### I 講座・講演会

1. 第6回ラテンアメリカ事情講座『中米危機の分析』10月7日~83年1月20日 毎木曜日 18:40~20:10 (全14回) 講師:加茂雄三, 二村久則, G, アンドラーデ, 水野一, 武部昇, 原田金一郎, 堀坂浩太郎, 渡辺利夫, 作道宗二, 石井亨
2. 講演会『ラテンアメリカ政治の比較分析』11月29日 18:00~20:00 講師:エーリオ・ジャグアリーベ
3. 講演会『インカの宗教』(講師:ホセ・レオン=エレラ), 『ペルーの芸術』(講師:ウッテ・レオン=エレラ) 11月29日 18:00~20:00
4. 公開研究会(予定)『メキシコ経済の最近の動向』12月10日 18:00~20:00 報告者:ピクトル・ウルキディ
5. 講演会(予定)『ガルシア=マルケスと私』'83年1月 講師:安部公房 (講師の都合により日は未定)

#### II 来訪者

1. 10月1日 ラテンアメリカ19ヶ国より27名の研修生(外務省招聘)
2. 10月15日 メキシコの大学長3名:アルフレッド・ピニエイロ・ヌエボ・レオン自治大学長, ホルヘ・エンリケ・サンブラノ・グアダラハラ大学長, ルベン・カストロ・バハ・カリフォルニア自治大学長
3. 10月20日 エドゥアルド・アルベルタル, E C I E L (Praqrama de Estudios Conjuntos Sobre Integración Económica Latinoamericana) 事務局長
4. 10月29日 クラウディオ・ステルン, コレヒオ・デ・メヒコ教授

#### III 出版物

1. 『イベロアメリカ研究』4巻2号
2. 三橋利光他著『ラテンアメリカの中間階級—その政治・経済・社会的地位に関する研究』 ¥2,000
3. 『ラテンアメリカ文献目録 1981年』'83年1月出版予定

#### 4. 各種研究費補助金を受けたラテンアメリカ地域研究関係課題一覧

i) 57年度文部省科学研究費補助金

[総合研究B]

○「ラテンアメリカ地域研究の問題点—学際的研究計画のための連絡」 増田義郎 (東大)

○「発展途上国との学術協力の現状とその在り方に関する基礎的研究」 市川正巳(兵庫教育大)

[一般研究C]

○「ブラジル日系企業の研究」 水野一(上智大学)

[一般研究C・継続]

○「米西戦争の世界史的研究」 高橋章(大阪市立大)

[奨励研究A]

○「メキシコにおける高等教育制度改革に関する研究」 斉藤泰雄(国立教育研究所研究員)

[海外学術調査]

(1) 現地調査・本調査

○「南米における赤色土地帯の農業生態学的調査」(ブラジル・コロンビア・ペルー) 田中明(北大)他4名

○「アンデス中部地域の古・中生界の生物層序学的研究」(ボリビア・ペルー) 坂上澄夫(千葉大)他5名

○「熱帯圏北半球アメリカ地域原生園芸植物の遺伝質解析と利用(第3次)」(グアテマラ・ホンジュラス・ニカラグア・コスタリカ・パナマ・メキシコ) 飯塚宗夫(千葉大)他7名

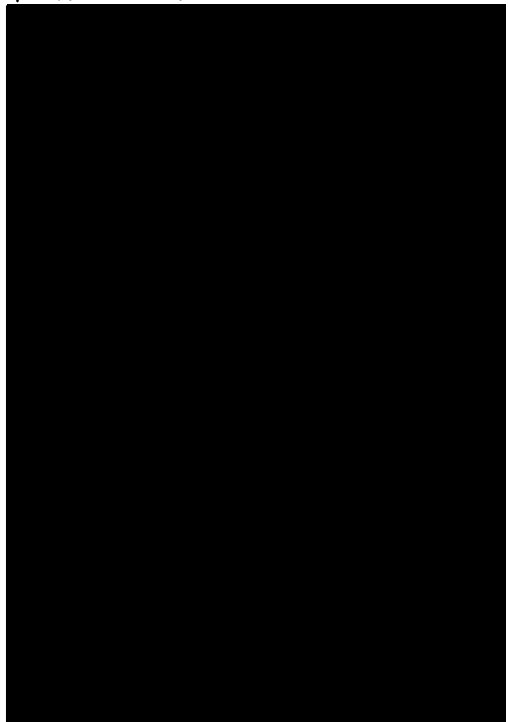
○「第3次核アメリカ(中米・アンデス地区)調査—中央アンデス北部における形成期文化の研究」(ペルー) 寺田和夫(東大)他8名

- 「古代ペルー人の歯科人類学的研究」(ペルー) 三浦不二夫(医科歯科大)他11名
- 「熱帯新大陸における広鼻猿類の種分化に関する研究——とくにホエザルを中心とした広鼻猿類の遺伝学・形態学的研究と漸新世・中新世の地層の古生物学・地質学的研究」(コロンビア・ボリビア) 野上裕生(京大)他7名
- 「南米型及び中米型オンコセルカ症とその伝搬機構の比較研究」(エクアドル・グアテマラ) 多田功(熊本大)他7名
- 「東北ブラジルにおけるマンソン住血吸虫症の病態生理学的及び免疫学的調査研究」(ブラジル) 浅見敬三(慶応大)他6名
- 2) 予備調査
  - 「南部アンデス火山帯の地球化学的調査研究」(チリ) 小沼直樹(茨城大)他7名
  - 「世界的規模における対日イメージの研究」(多数国の中でブラジル対象) 辻村明(東大)他13名
  - 「環カリブ海地域における複合文化の比較研究——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程」(バーミューダ, プエルトリコ, バハマ, キューバ, ジャマイカ, コスタリカ, パナマ, ガイアナ, スリナム, ギアナ, トリニダード・トバゴ, グレナダ, バルバドス, マルチニーク, ドミニカ, ハイチ) 山口昌男(東外大)他6名
  - 「発展途上国社会への日本移民の環境適応・同化および貢献に関する実証的研究——ボリビアにおける日系人社会の実態調査を中心として」(ボリビア) 若槻泰雄(玉川大)他4名
- 3) 調査総括
  - 「南米ボリビア共和国およびチリ共和国, アンデス地帯の多金属型熱水鉱床学的調査」 荻木浅彦(東北大)
  - 「中南米, 特にペルーおよびエクアドルにおける肺吸虫病の病態生理学的研究」 横川宗雄(千葉大)
  - 「中央アンデス農牧社会の民族学的研究——垂直統御と環境利用」 増田義郎(東大)
  - 「中央アンデスの地球物理学的調査」 河野長(東工大)
  - 「南米大陸における広鼻猿類の系統・進化に関する研究」 渡辺毅(京大)

- 「メキシコおよびグアラマラ地域における栽培植物の調査」 田中正武(京大)
- 「南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究」 野村暢清(九大)
- 「チリ中南部における氷河の変動と気候変動」 野上道男(東京都立大)
- 「日本人食生活の基本的パターンに関する公衆栄養学的研究——ブラジル在住日系人の調査」 沖増哲(広島女子大)
- 「南米における隠花植物の分化と分布に関する研究——特に東亜関連群について」 井上浩(国立科学博物館)
- ii) トヨタ財団 57年度研究助成
  - 「都市の民俗としての祝祭・宗教儀礼および世俗儀礼の研究——メキシコ・シテイにおける民俗的祝祭と新大統領就任をめぐる政治的儀礼とのかかわりを中心に」 今福龍太(社会開発総合研究所研究員)
- iii) 日本学術振興会 58年度国際共同研究
  - 「ブラジル南部における湖沼遷移に関する陸水学的研究」 西条八東(名大)他5名

## 5. 事務局から

### i) 新入会員(第13回理事会承認)



## 1983年度大会について

日本ラテンアメリカ学会第4回大会は、6月4日(土)および5日(日)の2日間にわたって東京の成城大学で開催される予定です。シンポジウム、研究報告、記念講演などが計画されております。つきましては、研究報告に関して分科会を編成するために報告希望をとることになりました。同封の葉書に研究報告のテーマをご記入のうえ、1983年2月10日までにご返送ください。

通知ください。

### iii) 会費納入状況について

1982年11月16日、会費未納の方に督促状をお送りいたしました。この時点でその数は88名、80年度・81年度未納の方と合わせて、延べ人数112人にのぼっております。手持資金が少々心細くなっておりますので、下記のいずれかへお払込み下さるようお願いいたします。

○郵便局振替口座 東京1-13630  
(日本ラテンアメリカ学会名義)

○第一勧業銀行渋谷支店普通預金口座  
1262358 (日本ラテンアメリカ学会代表増田義郎名義)

iv) 会報を一層充実させるために、各地で開催されている研究会、会員諸氏の研究活動報告など、お送り下さい。

v) 著書および論文抜刷等をご寄贈下さい。会員の業績を系統的網羅的に学会事務局で収集整理して保管し、閲覧のため公開したり、文献目録作成の資料にしたいと考えております。既に相当数を受領しておりますが、一層のご協力をお願いします。

vi) 原稿をお寄せいただきます時には、印刷の都合上、かならず20字詰横書きにしてくださいようようお願いいたします。

☆会員名簿記載事項(所属機関、連絡先住所・電話番号)に変更がございましたらお知らせ下さい。海外に長期滞在なさる場合にも、滞在地連絡先・滞在期間と合わせてその旨御

### 西日本部会 第7回定例研究会のお知らせ

日時 1983年1月22日(土)  
13:00~16:30  
場所 京都外国語大学国際交流会館  
(〒615 京都市右京区西院笠目町  
6 京都外国語大学内) 電話  
075-311-5181 (大代表)  
(阪急西院駅下車徒歩約12分 または市バス梅津車庫前スグ)  
報告 1. 「インディヘニスモ」  
原田金一郎(大阪経済法科大学)  
2. 「アストウーリアスの『トウモロコシの人々』」  
高林則明(京都外国語大学)  
お問い合わせは、京都外国語大学・大垣貴志郎(電話上掲)まで。

No.10 1983年1月1日発行  
日本ラテンアメリカ学会事務局  
〒153 東京都目黒区駒場  
3-8-1  
東京大学教養学部8号館  
中南米分科会付  
☎03(467)1171  
内線579